



TITLE:

清代における地方都市(縣城)の構造
: 綏遠省薩拉齊廳の場合

AUTHOR(S):

今堀, 誠二

CITATION:

今堀, 誠二. 清代における地方都市(縣城)の構造 : 綏遠省薩拉齊廳の場合
. 東洋史研究 1970, 28(4): 363-401

ISSUE DATE:

1970-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152806>

RIGHT:

清代における地方都市（縣城）の構造

——綏遠省薩拉齊廳の場合——

今 堀 誠 二

プロローグ

私が綏遠省において社會調査を行なったのは、一九四四年のことである。これにつづく大革命で、中國の狀態は一變し、はからずも私の調査が、革命の對象となつた舊中國の實態調査としては、最後のものとなつた。調査結果は、ほとんど未發表であるが、村落および都市の機構については、大體、次のように要約することができる。

舊中國では、人口の八割が農村に居住し、農業が主な産業だから、都市といつても本質的には農村の社會構造なり經濟體制なりによって、規定されざるを得ない。清代の農村が村落共同體であつて、そこには地主の支配と佃農の抵抗が、主要な矛盾として存在していたのに對し、都市では都市共同體が形成され、商業資本の支配と職人の抵抗があつた。封建都市の基礎社會はギルドであつて、各種のギルドが勞資の對立をはらみながら、共同體を作り、集團的利己主義を追究していた。農業では家が生産の單位であつて、家産共同體と家父長專制が、家を支える二本柱であつた。商工業においては、仕事場が生産の單位であつて、そのメンバーは家と同じく共同體として組織されていたが、親方と職人徒弟の間には家父長專制的な支配隷屬關係がみられた。家族制度と徒弟制度は、子弟と徒弟を教育して、家父長專制と仲間的な共同關係を身につけさせる道具であり、祖先崇拜と祖師信仰がこれを助けて、「共同體」を作り出す機構となつていた。また、農業

は土地所有を基軸としていたが、すべての仕事場は、基本的には商業資本によって所有されていた。農民は地主に對して小作條件の改善を求めたが、職人は勞働條件の改善を要求した。「共同體」という土俵は、地主や商業資本の專制の場であつたが、農民や職人もこの土俵を利用して階級闘争の手段とした。

むしろ都市には、農村とちがった特色があつた。ギルドには、村落とちがって徒弟教育から生じた、高い技術があつた。商業資本はギルドを通じて同業者を結集しただけでなく、付近の農村に網を擴げ、村落の共同體的強制力を利用して、農産物の買付けや都市製品の販賣を、獨占的にすすめていた。共同體が健在である限り、農産物を獨占價格で買付け、手工業製品を獨占價格で賣込むことにより、流通過程の中から巨額の利潤をひき出すことができた。商業資本は、封建的な土地制度や村落共同體の機構によつて規定された中世的な資本であつたが、同時に、地主・村落制度を利用して農村を支配し、これを搾取していく力を持っていた。手工業の高度の技術が、農家の副業や家内仕事を驅逐して、代わりに都市製品を農村に賣込むことを可能にした。都市は農村に對する搾取者であり、商業資本はギルドと村落の二つの共同體を媒介として、流通過程の中から最大限の利潤をひき出していった。さらに、質屋を中心とする高利貸資本が商業資本と組んで、農民の富をすいあげた。

都市には村落とちがって、清朝權力の末端機關が設置されていた。政治權力とのつながりが、商業資本の支配力によつて、大切な要素であつた。政治權力は共同體を利用して、徴税と治安の維持をはかったが、共同體の側でも、地主なり商業資本の專制に對する、國家權力の後盾を誇示しようとした。

清朝權力は、中國本土はもとより、藩部や諸外國との貿易に道を開き、遠距離商業の繁榮を可能にした。この遠距離商業をになつて登場したのが、大商業資本であり、大都市であつた。彼らは直接農村をねらうのではなく、地方都市を傘下におさめ、國內的または國際的な取引から巨大な利潤をひき出そうとした。地方都市には、彼らの出店を設け、仲買店や運送業などの関連産業を配置して、結節點としていた。しかし、地方都市は縣下の農村との取引が主であつて、獨自

の經濟圈を設定し、大商業資本の取引高は、それに比べて大きくはなかった。もともと民國以降、資本主義經濟の進出につれて、こうした狀況はかなり變化したことは事實である。

この論文では、地方都市サラチ（薩拉齊）の社會構成を紹介するにとどめる。サラチでは、商會會長楊青蘭氏（原籍河北）の高教を得、また製紙業關係は李永昇氏（益泉紙房經理・原籍山西）の教示によつたが、兩氏の記憶に頼るというより、適切な史料を廣くさぐつて、史實の究明につとめたことは勿論である。

サラチ地方は、もとは遊牧地であつたが、漢人の入植とともに村落が生まれ、康熙・雍正年間には、ほとんど開墾が終わっている。都市の成立も雍正・乾隆の間で、現在の形態がいち早くとのつてゐる。漢人移民は、生命財産の安全を自分の手で守るために、いろいろな社會集團を作つたが、特に本街または闔街とよばれるギルドマーチャントの成立をもつて、地方都市が誕生したとみることができる。本街は店・麵・雜貨・當の四行によつて構成されていた。この四行はそれぞれ縣下の農村に對して、農産物の仲買、脱穀・製粉、農村への手工業製品の卸賣、農民相手の質屋として活動し、農村經濟によつて動脈および靜脈の役割りを果たしていた。本街には、四行から代表者を出して郷總とし、郷總四名は集團指導體制によつて、市政を掌握した。ギルドマーチャントの事業としては、自衛・公共井戸・消防・夜警など、村落の遺跡を受けつぎ、直接的には街巷自治體が行なつていた事業も含まれているが、政治・經濟・社會の全般にわたつてサラチ市政の全體をうけもち、外廓團體を作つて學校や軍隊を維持するなど、都市共同體にふさわしい任務を引受けていたといえる。

都市には同郷團體・街巷團體・園藝農民團體など、いろいろな團體が作られていたが、主要なものは商工業者が各同業者ごとに組織していたギルドであつた。ギルドマーチャントを構成した四行が、それぞれ「行」を組織したのをはじめ、商業ギルド八（四行を含む。以下同じ）、手工業ギルド十二（職人ギルドを含む）、運輸ギルドおよび高利貸ギルド各一などが、確認されている。このうち製紙業ギルドは、徒弟制度を柱に、同業者を同郷人で固め、祭倫を祖師と仰いで、共同體としての内的結合を強化していたが、商業資本家と職人は、勞働條件をめぐる矛盾をもつていたので、ギルドとし

ては、勞資合同の共同體を作ったり、勞資がそれぞれ共同體を作って對立したりして、複雑な歴史を展開した。職人だけのギルドを作らなかつた場合でも、勞資は徒弟制度・祭祀・市場獨占などで、共同すべき要素をもっていたが、同時に、工賃・待遇・生活規制などの面で、抗爭を必至とする條件もあつたので、共同體の中で專制支配と階級闘争の兩面が、兩者によってそれぞれ利用されていたといえよう。

行政機構では、乾隆時代に廳が置かれ、民國初に縣城となつてゐる。縣（廳）城の性格は、地方の中心として、縣下物資の集散地という役割を擔うことであつた。ギルドマーチャントを構成する四行が、その主役であり、その他のギルドも縣城の標準に従つて考え得べきものが大半を占めてゐる。もつとも、大都市的な要素もかなり含まれていて、蒙古などに輸出する商品を手扱した貨店、輸入した家畜の仲買に任じた牲畜店、同じく毛皮の皮莊、運輸業の拉駱駝的や車戸などが、それぞれギルドを組織してゐた。京津（北京・天津）資本を背景とするこれらの業者は、直接間接、遠距離商業に従事し、大商業資本の一環になつてゐたが、サラチの經濟は主として、縣下農村との取引に依存し、包頭や歸綏のように、蒙古・新疆と北京を結ぶ隊商の中心地とはならず、單なる中繼地にすぎなかつた。貨店等がギルドマーチャントに参加したのは、民國以降のことである。

第一章 ギルドマーチャント

第一節 沿革

サラチ縣は、清初に土默特旗右翼第五第六甲の戸口地または官灘官租地となつた地方であり、私墾の形による漢人入植が認められていたので、農耕化はかなり早かつた。^①都市が成立すると、乾隆六年に理事通判と管獄巡檢が置かれ、同二十五年に薩拉齊廳になると同時に、善岱の通判を廢してその管轄地をあわせた。同治五年に廳の長官は、通判から理事同知

に昇格している。^③ 民國元年、廳を改めて縣とした。こうした官廳の設置は、都市の形成の反映であって、雍正十二年に武財神の關帝廟が創建されたのをはじめ、乾隆中には祖師廟・聖母廟・城隍廟・火神廟・玉皇廟・觀音寺などが建てられているから、乾隆年間には、すでにそれだけの經濟力を擁していたわけである。清末まで、この地方の主産である穀物や油の取引をはじめ、縣内農村の需給の中心地として榮えたが、^④ 民國四年、盧占魁匪の占領劫掠によって城内一空に歸し、その後もしばしば兵匪の亂にかかつて、市況はにわかに不振となった。ただサラチは經遠有數の大縣で、數百の村落が縣城の再建を支え、地方都市の安定性を實證した。

ギルドマーチャントの成立は、市街地の發達と軌を一にしている。乾隆二十四年には「本街」という名稱を以て、郷耆の領導のもとに市政に當っている。本街の實體は、店・麵・雜貨・當の四行から成りたっていた(D1)。「本街」は、名稱からいっても街巷自治體から出發したと考えられ、「凡居_二市廛_一之民、皆踴躍、自_二鄉耆_一以迄_二街巷_一出_二粟_一」(D2)と記されているように、組織的にも城内の全街巷を包括する、地緣的地方團體の要素を多分に帶びていた。本街の名は乾隆(C4)から道光^⑤・同治(A5・D11・H1)と續き、闔街の稱も道光(D6)に用いられている。街巷自治體は、村落自治體に淵源を有するが、縣城である以上、商工業が街巷の中心となり、道路に沿った家並のグループといっても、實際には四行の舖戶によつて組織されていたから、街巷團體ではなく、ギルドマーチャントの性格を持つものといわねばならない。本街を「四行」とよぶ例もあり(D11)、四行がそのままギルドマーチャントとして他のギルドに對し、支配的な立場にあったわけである。このほか、薩拉齊行(F1)の名が乾隆四十年にあらわれ、公行の名が道光から光緒までの間に廣く通用し(D8・F5・E3)、宣統年間には公社ともよばれている。地名を冠して、本街・闔街・行・公行・公社等という場合は、いずれもギルドマーチャントをあらわす文字として、廣く使用されていたし、それを構成するギルドの數によつて、四行とか、八行・十三行とかいう言い方で、ギルドマーチャントをよんでいる例も少なくない。民國初年に商會と改稱したが、ギルドマーチャントとして活動を續け、今日に及んでいるのである。

サラチの住民の主力は、山西省から黄河ぞいに移ってきたものの子孫で、忻州・定襄・惇縣・文水・太谷・祁縣が主な原籍地である。當初は同郷ごとに團結し、同郷的な閉鎖性が各ギルドについても見られたが、のちに土着化したため、本籍地は山西というよりむしろ「薩拉齊縣」となり、自ら「本地幫」を稱するに至った。彼らの三割は本來の原籍地が何處なのか、自分でも分らなくなっている。山西以外の各省人は、全住民の約一割を占め、北京・天津・東光・交河・定州等の河北幫を主とし、武安等の河南や山東人もいくらかいる。これらは天津開港と京包線の開通につれて乗り込んだ新參者であつて、河北幫と本地幫の對立は著しく、貨店そのほか京津との取引業は、河北幫の獨占するところである。古くは山西商人の收奪に對抗し、のちには河北幫の進出に對抗せねばならなかったことが、「土着化」を促した原因と考えられる。これ以外に回教徒と蒙古人があり、前者は三百戸千二百人、後者は三十戸二百人となっている。

宗教の上からいえば、公行は城内にある主要な寺廟の全部において廟會を行ない、その神威の増進に貢獻することによつて、全市民の「共同體」としてのイメージを持たせようとしていた。これには、城内にいる回教・ラマ教徒との對抗意識が含まれていた。近來は、基督教徒と天主教徒も少數ながらいて、教會堂各一、信徒四百および二百五十を擁しているのはともかく、日中戰爭以來、一貫道などの類似宗教の攻勢も目立ち、いわゆる佛教徒のもつ宗教的情熱が、ギルドマーチャントの支柱となり得たか、問題である。

同業の點では、四行は對農村需給機關として共通し、縣下の農村を彼らの集團的利己主義の支配下におくことが、本街の存在意義であつた。四行は巨商ぞろいの商工業で、地元の商業資本の代表格であり、比較的早く興された團體である事（第三表參照）と相まって、闔街の組織者となることができたわけである。ただギルドマーチャントとしては、全商業資本の團結をはからざるを得ないが、四行の團結とは互いに矛盾をもっていたわけである。まして職人との對立や農村の利益との矛盾もあり、「都市共同體」は内面的な統一性を缺いていたから、地縁とか同郷性とか宗教を活用したとしても、社會集團としては強固になり得なかった。公行としては、權力機關的な性格を帶び、市政を掌握することによつて、「支

配の客體」としての市民を、服従させざるを得なかったわけである。

第二節 組 織

本街は乾隆三十四年にはすでに雜貨行・閤行・麵行・當行・六家・店行・閤行によって組織されていたが（D1）、嘉慶十二年・道光六年・道光九年・道光二十四年（G3）・同治六年・同治十三年（D11）などにおいても、同じく四行で構成されているのである。ギルド・マーチャントは、雜貨舖・製粉業・質屋・穀物仲買店に屬するすべての店舗により、排他的獨占的に構成されていたが、メンバーは各行毎に區分され、四行を媒介として本街に参加していた。本街では、メンバーにあたる言葉は舖戸（A5）であり、經費も舖戸が單位となっていたのに對し、役員等は各行毎に選出されているからである。

公行の代表は、郷總と呼ばれている。歴代の郷總を表示してみると（第一表）、道光初までは十二または十四軒、道光末以後は八軒（光緒十八年度のみは六軒であるが、これはおそらく缺員があったものと思われる）、民國以後は四軒となっている。公行が四行によって組織されている以上、會首がその各行から選出されることは想像に難くない。第一表に示されているように、各時代の郷總は、いずれも四行を含み、とくに當行・店行が二軒ずつ代表を送っているから、他の二行も、原則として二軒ずつであったことが推定できる。民國以來の商會では、各行とも一軒ずつとなった。各行が等數の代表を送って、平等に本街を支えたのは、共同體の性格からくるものといえる。值年會首（D5E1）、すなわち當番年の會首という表現もあるが、任期は一年というわけではなくて、むしろ連續して數年勤めているものが多く、元興和の如きは道光九年から同治七年まで四十餘年、ずっと郷總の任にあったのである。楊氏は、郷總は有力な店舗間だけで、輪流（交代）によって選出されて來たといわれているが、第一表をみても、郷總の顔ぶれは巨商に限られ、道光以來、二十五軒が入れかわりたちかわり現われるのに對し、これ以外では一・二の新顔が毎期、現われるにすぎない。メンバーは半ば固定

第一表 薩拉齊の歷代鄉總

年號	職名	店鋪(人)	名	資料
嘉慶 8	鄉總	復盛永 ¹ 會逢號 永德隆 俊德昌 天享泰 恒立局 增降合 復勝園 廣盛泰 萬興店 ^X 復興永	C 6	C
道光 9	"	萬美國 (復興魁) 元興和 ² 世德泉 興盛泉 萬金全 永慶玉 大來號 聚和號 意成號 天成店 ^X 世德恒	C 7	C
同治 4	"	慶豐泰 元興和 ² 人和當 元盛永 合盛永 雙會昌 ⁴ 昌興號 元和店 ⁵	D 6	D
5	"	新福盛魁 元興和 ² 人和當 元盛魁 ^X 全盛西 元盛德 德盛泰 元和成 ⁵	A 5	A
7	"	元享慶 元興和 ² 永豐泉 元盛魁 ^X 義盛泉 雙會昌 ⁴ 元泰昌 義成店	E 1	E
8	"	新福盛魁 元享盛 人和當 ³ 元盛店 ^X 義盛泉 豐裕長 義成美 元和成 ⁸	B 6	B
10	"	復源泰 會逢號 ¹ 天元當 ¹⁵ 謙和當 ⁹ 廣順恒 ¹³ 豐裕店 ^X 復盛泉 永興成	A 7	A
13	"	元享永 元興和 ² 天元當 ¹⁵ 永盛長 ¹⁶ 義盛恒 ⁴ 雙會昌 ⁴ 元泰昌 ¹¹ 德興店	D 11	D
光緒 8	"	復源泰 崇盛源 德和當 ¹⁹ 泰恒裕 ¹⁸ 泰泉昌 ¹⁷ 雙順源 新盛泉 新盛店	D 8	D
8	鄉者	(王吉) 泰泉昌 ¹⁷ (張永瑞)	F 4	F
9	"	(杜士傑) 天順泉 德和當 ¹⁹ (楊聖麟)	F 4	F
9	"	(杜士傑) 楊聖麟	F 5	F
9	鄉總	大興泉 天順泉 崇盛源 德和當 ¹⁹ 泰恒當 ¹⁸ 湧泉茂 豐裕號 ^X 謹興店 ^X 復興隆 ²³	E 2	E
16	"	復源泰 崇盛源 德和當 ¹⁹ 源泉囊 德和西 聚生樓 永合店 ^X 復興隆 ²³	E 3	E

付記 — 印は首席および次席郷總、●印は當舖、×印は糧店、△印は雜貨舖、√印は麵舖。數字は二度以上現われてくる屋號の經營番號を示す。郷總は店舖名のほか、個人名が記されていることがあるが、個人名は必要あるもののみを示した。道光九年の（復興魁元興和）はC7が他の郷總と區別し、最上位にある郷總である事を特記しているので、カッコを付して區別とした。店舖名からその營業内容をひき出すには、某々當は當舖と判斷した。源泉●および泰恒裕については、薩拉齊縣志卷十金融典商に、元興和については楊氏により、それぞれ當舖である事が明らかにされている。糧店は某々店とあるものをとった。新盛店は綏遠通志④の糧店名の中にも見出される。雜貨舖は麵舖とともに綏遠通志による。同治五年の兩資料は、全く合致した店舖名を示している。光緒九年度の郷者は、F5の示すところでは三人で、その中にE2の示す同年の郷總には見出し得ない張永瑞を含んでいる。しかしF4の示す郷者は二家で、かつ張永瑞を含まず、F5の他の二人の郷者と一致し、かつ、いずれもF2の郷總に含まれている。張永瑞はその前年の光緒八年の郷者であり（F4）、なんらかの事情で、F5は前郷者たる彼をもあわせ記載したのであらう。

的で、それに新血液を補充するのが原則だったようである。郷總が輪流值年（交代當舖制）で選ばれたと記されているのは事實であるが、これは選舉法を示す言葉としては正確な表現ではない。店舗（經營）が基本であって、店の格付けで郷總になるものがきまっていたが、郷總を示す場合に、屋號と同時に個人名を併せ記しているのが普通だから、經理（支配人）の評価が問題にならなかったという譯ではない。民國以後、郷總は董事と改められ、國民革命以後、委員と稱するようになったが、その頃から四行の獨占は崩れ、貨行その他の河北資本が郷總の一角を占めるようになった。

郷總には、郷者と總領が含まれている。郷總とは、その兩者から一字ずつ取って造った造語かとも思われるが、郷者と總領の區別よりも、兩者を包括した郷總という概念の方が、重要な意義を持っていたことは、第一表によって明らかである。郷者の名は、乾隆三十四年には、すでに見出されるが（D7）、道光九年（C9）・光緒八年九年（F4）の例が示すよ

民國 3 19 18

經理人

會逢號

崇盛源

泰恒裕

源泉●

泰泉昌

三義泉

永合店

義泰永

●18 泰恒裕

●24 源泉●

△16 義盛恒

×13 豐裕號

×22 謹興店

巨泉湧

●24 源泉●

●17 泰泉昌

●20 新盛泉

×25 永合店

義泰永

D 10 A 8 A 1

うに、二軒ずつで、郷總の中から選ばれている。總領の稱は、記録的には道光二十五年に初めて現われており、郷者以外の郷總として示されている（A10）。

郷者の選出法については、薩拉齊縣志は錢行・當行が郷者に、糧行貨行が總領になったといひ、楊氏は貨行・當行が郷者、糧行・貨行・麵行・當行が總領になったといひ。兩説の一致しているのは、當行が郷者の一角を占めていたこと、郷者・總領になるには、ギルドの格付けで分擔がきまっていたこと、郷者が二名であったことなどである。第一表に示したように、郷總中の第一順位と第二順位のものが、かりに郷者だったと推定するならば、郷者のうち、一つは當行が占め、他は雜貨行（同治十三年）・麵行（光緒十六年）・店行（同治七年・光緒十八年・同十九年・民國三年）から選ばれたことになる。當舖は、縣下の主要な農村にそれぞれ店舗を置き、農民に對する高利貸しを営んでいたから、山西資本の地方的な支柱だったのである。任期については、當舖の場合、光緒八・九年には郷者が交代して、別の當舖が郷者となっているが、同治四・五年・光緒十八・十九年に明示され、人和當の場合に暗示されているように、同一の當舖が引續きその地位を占めているので、毎年、改選されたわけではなかった。他の一つの郷者の席は、光緒十八年から民國三年までは店行が占めていたと考えられるから、三行が輪流で當たった譯ではなく、むしろ店行の優位を承認すべきであろう。店行は縣下のすべての村落に店舗を設け、米穀の仲買いを獨占的に営んでいただけでなく、金融業をも営んでいたから、郷者の地位を占めたとしても怪しむに足りない。このほか、縣志には錢行が、楊氏は貨行が、郷者に任じたとされている。錢舖は清末には約二十軒に達し、その店舗名も明らかであるが、第一表の中には、一つも現われていない。貨行についても何等の徵證もない。清代においては、この二行は郷者になる資格をもっていなかったと考えられる。錢舖は、清末以來、大都市で活動していた舊式銀行で、商業資本はこれに依存していたが、多くのギルドマーチャントでは錢舖をメンバーからしめ出していた。貨行は貿易商であつて、主として蒙古に赴く隊商（旅蒙商）に北京・天津などから購入した物資を提供するとともに、隊商のもたらした獸皮獸毛等を京津に轉賣する仲買商であつたから、サラチという枠を越えた、國內市場また

は國際市場の一環をになっていた。本街は、こうした錢鋪や貨店をメンバーからはずすことによって、地元の商業資本の集團的利己主義を守ろうとしたのであろう。

宣統年間になると、郷耆は公社の社長と改稱され、つづいて商會の經理人となり（D 10）、同じく會長・副會長、主席を経て、日中戦争後、再び會長にかえった。錢・當舖は民國四年に全部破産し、商會となってからその任務も變化したので、主席は糧店行と貨店行から選出されるのが慣例となった。

郷總の任務は甚だ重い。道光八年と宣統三年の河川護岸工事には「動^カ衆興^シ工^コ」、同治八年に學校と義園を經營し、その基金の管理を行ない、嘉慶二十五年には城隍廟（D 3）、光緒二十年には呂祖廟の建築工事を主宰しているなどは、その一端に過ぎない。公行の決議または執行機關としては、郷總があっただけであり、公議という言葉はあるが、四行の舖戶でも、その意志を直接公行に反映させる手段はなかった。商會となつてからも、大會が開かれたことはなく、すべてを委員に一任している。

保長は公行でやとっている職員である。差役・地保ともいわれ、俸給を與えられて、日常の雜務處理に従った。世襲であつたといわれているが、第二表によれば潘・王兩家が大體その地位を占めている。このほかギルドマーチャントが管理

第二表 薩拉齊の保長

年	資格	氏 名	資料
道光 19	保 長	潘發榮 王益傷	C 7
同治 5	〃	梁武祿 王 富	D 5
光緒 7	〃	潘福榮 王正倫	C 3

していた各事業體に、専任職員として配置された公行使用人も何人かあつた。保長は商會となつてから庶務と改められたが、職員機構は大いに縮小されたという。

第三節 事業

(一)官事 專制權力の觀點からいえば、清朝は公行に依頼してサラチを支配し、公行はこれに協力することによって、公行の專制支配の後盾として、清朝權力の支援を頼むことができた。共同體の側面からみれば、公行は市民の要求をとりあげ、これを官憲に承認させる—例えば減税—ことによって、市民を共同體にまきこみ、共同體的強制力をつくり出すことによって、清朝に協力—例えば徵税—した。ここに清朝の政治的基盤があり、また民衆の抵抗の基盤もあったわけである。サラチの市民税は市民全體で納付する總額をきめ、これを公行が負擔していたが、あまりに過重となつたので、交渉の結果、光緒十八年に年額九〇〇兩ということで、官憲に承認させている(A1)。牙税・取引税などの商税の取りつぎもやっていた。官憲は雜徭として、市民が道路建設や炭鑛挺身隊などの人夫に出る義務を課したが、本街は人を雇傭して、官の要求するだけの勞働力を提供し、舖戶にその費用を分擔さすことで、相互の摩擦をさけていた。民衆のために官憲に交渉した例としては、光緒九年に觀音寺の寺址の一部が、清真寺から侵された時、七社の社首を助けて薩拉齊廳の訊斷を得たりしている(F5)。

(二)調停 市民は薩拉齊廳の裁判にかかることをきらい、民事事件はもとより、刑事事件まで公行の調停にかけて解決しようとした。鄉總が中に立ち、賠償による調停で、ほとんど片付いたといわれている。商會になつてからも、商事公斷を行なつてきた。

(三)經濟規制 公行は商業資本の活動を支援し、とくに農村支配に必要な通貨の公定、商業慣行の遵守、度量衡器の強制的検査などを行ない、また高利貸しや商略など、封建的經濟制度を擁護した。民國四年、盧占魁匪の亂後、商會は不換紙幣である「流通券」を發行し、商業の救済に當つたのであるが、これはサラチで發券を行なつていた錢莊が全部倒産したので、その缺を補うためであつた。流通券は民國十五年に廢止されたが、商會は不換紙幣をサラチ唯一の紙幣とし

て流通させるだけの、信用と強制力をもっていたわけである。^⑤

四自衛 清代には、官兵として綠營と捕盜營が駐屯していたが、存廢常なく、數も少なかった。民國以來、時に大軍が駐屯することはあつても、軍閥の擄取を受けるだけで、市民の迷惑となることが多い實情であつた。^⑥官兵は全然たよりにならず、縣城の防衛は公行の任務となつていた。城壁は同治七年に起工し、同九年に完成したが、近隣の鄉村からも援助を受けたとはいへ、公行が實際の責任者であつた。公行はこの事業を主宰する經理を公行から出し、經費を負擔し、人的・物的のあらゆる準備を自ら行なつたのである。^⑦ギルドマーチャントの軍隊がこれを守つたが、この軍隊は、時代によつて四期に分けることができる。第一期は「歩辦」で、私的な傭兵である。いつ始まつたかわからないが、同治五年まで續いている。三人の統領の下に(D5)百餘人の兵をおき、治安の維持に功があつたようである(A5)。第二期は團防で、官憲公認の傭兵組織である。同治六年、陝西・甘肅の騷擾がこの地方に波及する勢いを示したので、その多に團防制を始め、九年十月に廢止されるまで滿三年間行なわれた。關帝廟内に團防總局を置き、「民團」を雇傭し訓練した。「公行團防總局」(A7)といわれているように、公行の事業機關であつて、紳商李聯香・史麟玉など、二十四軒の大商店が經理に任じ、團防事業を直接擔任したのである。費用の一部は四郷すなわち全縣の農村に仰いだが、殘餘は公行で引受け、經濟上の監督は鄉總がこれに任じた。^⑧清朝公認の自衛軍となつた點に特色があるが、實質は歩辦とたいして變わらなかつたであらう。ただ、城壁の築造もこの時期に起工し、完成しているから、制度的に整備されただけの効果はあつたものと思われる。第三期は「保甲」で、市民自身が自衛の任務についた時期である。團防の解散後、東・西・南・北の四大街の集中點に保甲總局を設立し、保甲法によつて十戸を一班、十班を一甲に組織し、甲を集めて總團を置いた。班長・甲長・團長は推薦制により、甲丁は戸を按じて選定し、團丁には時々訓練を行なつた。總局には武器として銃器をおき、有時の際は鐘をならして團丁を召集するのであつた。相當の成果があつたと記されている。^⑨市民の自衛といつても四行の專制下にあつて、民衆がどこまで自衛に熱意を燃やしたかは疑問であり、有名無實になりやすく、盧占魁匪事件には、その無力を暴

露した。第四期は保衛團で、民國五年から日中戦争までである。この時期は、各戸から團丁を募集するが、月給を出すのであるから傭兵である。團總がすべ、團丁の訓練を行ない、銃器・服裝・馬匹を備えた。特色は、各鄉村にもそれぞれ團丁を置いて分團を作らせ、全縣で約一千名の兵員を擁した點である。團總は、いわば小軍閥であつた。民國十一年に駐屯軍と衝突し、二日にわたる市街戦の後、解散せしめられたが、ほどなく回復し、十五年にも馮玉祥軍と戦つて、銃器を奪つたりした。匪賊に備える點においては、相當の効果をあげたといわれているが、要するに軍閥としての役割を出なかつたであらう。このように、効果には疑問があるが、ギルドマーチャントが軍隊をもち、都市の防衛に當たつてきた點は、重視さるべきであらう。

(d) 公共事業 各方面に手をひろげており、中にはかなり成績をあげた者もある。(a) 治水 水潤溝は、水潤溝門村から南に延びて、縣城に至る河であるが、縣城が低地にあるため、夏にはよく洪水を起こした。^⑤ 乾隆四十年に、北門外に保安石垣を築いて防守することになり、^⑥ その後も再三修理を行なつてきた。道光八年に鄉總が責任者となり、延々六里にわたる土堤を造つて水を南に流す計畫を立て、衆を動かし工を興した。その堤防上には柳を植えて代わる代わる伐採し得るようにしたが、實益と風致とを兼ね備えた事業だつたという。^⑦ 咸豐六年には、洪水が起こり、再修理を行なつてゐる。^⑧ 光緒三十年以來、補強を怠り、損壞が甚だしかった。公社は宣統三年に堤防を補修し、木を植えて舊觀に復せしめた。^⑨ 民國以降、商會となつてからも六年・十三年・二十三年・二十五年に、縣の農會と連合して、その修理に任じてゐる。一九三九年には、土堤を石堤に改める大工事を行なつたが、これを機會に鄉村代表をも加えて商會内に保安石壩保管委員會を組織し、公田を備えて、その小作料で常時、修治に當たることとした。^⑩ (b) 公共井戸 サラチの習慣によれば、飲料水用の深い井戸は街巷が設備し、維持すべきものとされている。牛馬や駱駝の飲料用としても、この種の井戸は不可缺であつた。公行は街巷に援助を與える立場をとり、例えば道光二年に龍泉井を重修した際、責任者である東大街を助ける意味で、公行から八千文の布施を出したりしている(A3)。(c) 學校 同治八年に「教民修德」の目的から、團防費の一部で育才書院を

創設し、關帝廟の東に校舍を新築した。基金として六千吊を四行總領に寄托し、輪流值年による經管に委ねて、毎年七百二十吊の利息を得、これで經常費を賄うこととした。サラチ隨一の名士といわれた李聯香を初代の「經理」に仰いだが、その後も公行紳士の公舉により、品行端正にして眞面目な事務家を經理として書院の管理に當たらせ、立派な教師を選んで詩書を教えさせた。書院の章程もある。基金は他に流用しない定めであったが、光緒二十九年に蒙小雨等學堂（初級小學・高級小學併置校の意）の設立費に使用してしまったので、書院は消滅した。この新制度の小學校はサラチ廳立で、公行との直接の關係はない。(d)雨乞い 旱天の續く時は、關帝廟に壇を設けて、祈雨のための讀經・燒香・遊街をなし、降雨を見るまで續けた。降雨をみるとお禮の「謝雨獻戲」を行なった。古くは乾隆三十年に實施されているし(D1)、日中戰爭中も行なわれた。雨乞いは農村の事業のひきつぎである。(e)打更 毎夜、拍子木をならして城内を一巡し、時を告げ、火災・盜難の警戒にあたる夜廻りも、市民生活に密着した風物詩の一つである。以前は二人であったが、今は一人となった。公行の事業であるが、俸給は出さず、「打更的」が自分で住民から金をもらって歩き、生活の資とした。打更は、本來は街巷の責任であるが、本街が一括して實施したわけである。(f)消防 主な街巷では義勇消防隊をつくるのがたてまえであり、公行が擔當していた。日本占領中に、水龍（ポンプ）などを買って近代化したのが、以前の記録は見あたらないので詳細は明らかでない。(g)橋梁 大黒河の橋の修理に寄付した例がある。

(h)慈善 これには随分努力をしている。(a)義園 同治九年に團防費を節約して設置した。二カ所に分れ、一つはサラチの西南のト吉壤に、一つは東の小販園村におかれた。前者は早く滅びたが、後者は約一頃^①の土地を有し、周圍に柳を植え、中に寄棺所（棺を元の故郷に送るまで一時的に預かっておく建物）を築き、駐守人を置いて市民の利用に委せた。農地が數畝付屬していて、駐守人はこれで衣食していたが、他の經費は育才書院の經費から支出し、管理も書院で引受けた。書院の消滅後、商會が直接管理するようになり、民國元年に土地も買い足した。今日も駐守人二人を置き、利用手續は商會で行なうが、全く制限なしに廣く利用させているという。(b)祭孤 李聯香の膾入りで始められた。公行が主體

となつて恤陰會を組織し、各方面の寄付金一千吊を集めて基金とした。基金は公行が預かつて、毎年利子九十六千文を得、清明節と十月一日に、孤魂（子孫がなく、したがって祭ってくれる者のない靈魂）をなぐさめるため、僧をよんで讀經と施餓飢を行なうのであった。同治十三年の碑（D11）があつて、會館に残っているが、民國以後、貨幣價値の變動で事業は中絶した。（c）修廟 城隍廟については、乾隆三十四年の創建（D1）と嘉慶三十五年の重修を（D3）、玉皇廟では嘉慶八年（C6）と光緒七年（C3）の重修を、財神廟では咸豐九年の重修（B1）、觀音寺では同治六年の重修（F3）、呂祖廟では光緒二十年の増修^⑧を、それぞれ公行の主宰または後援によつて行なっているから、縣城内の主な寺廟の創設・修理・増築は公行の人的物的な援助によつて行なわれたものが多いと判斷される。サラチ以外では、歸綏の十王廟に寄付した例がある。

（d）宗教的行事 公行が直接主催したのは、ギルドホールの所在地である關帝廟の廟會であつて、一月一日から一カ月半、毎日芝居を打ち續け、日中戦争中にも二・三回行なっている。河神廟・龍王廟・呂祖廟・財神廟・城隍廟でも、それぞれ日を決めて、五・六日ないし二・三日の間、祭典を行なっているが、この主催者は「五大社」で、公行と同じメンバーにより組織されており、外廓團體である。商業資本としては武財神である關帝を祭り、外廓團體に農業その他を含めた主要な神々を祭らせ、全市民の協力を仰ぐとしたわけで、公行は祭祀共同體でもあつたわけである。

サラチでは、官憲は市民のために何もしていない。市民の方でも官憲との接觸をうとめて避けたから、公行が、市政全體を引受けざるを得なかつた。ギルドマーチャントが政治・經濟・社會の全般について、大は軍隊による都市の防衛から、小は孤魂の祭祀まで、市民生活にかかわる全分野の世話を行なっている點は、「都市共同體」の實體をなしており、ヨーロッパの自由都市と相通ずるものをもっている。官憲も市政を公行に委ね、市民税も總額を決めて公行に負擔させており、公行の協力なしには何事もなし得なかつた。ただ公行には章程がなく、官憲も法的に公行の自治權を認めたわけではなかつたから、慣習としての權威や規制力はあつたにしても、法的根據を缺いていた。これにはヨーロッパの自由都市と

ちがつて、市民の自治意識や、權利義務の觀念が確立されておらず、トータルとしての全市民があっただけで、一人一人の市民の自由が明確にされていなかった點が、重視されるべきであろう。都市の自治は村落の自治を擴充したもので、自由への方向が明確でなかったといえる。

第四節 經 費

四行の店舗には、それぞれ經營の大小に應じて、その店が負擔すべき厘股（分擔比率）が定められていた。公行の經費は厘股に按分比例して徵集した。このような半ば税金的な私的課税を攤派とよんでいるが、光緒十八年碑にも攤派の記事を見出し得る（A1）。またギルドマーチャントは、四行以外の店舗からも、攤派を徵していた由であるが、その方法は明らかでない。今日では營業税に比例して取り立てている。攤派のかけかたとしては、乾隆二十四年から二十六年に至る間の本街辦公費の餘剰金十兩が城隍廟に寄付されているから（D1）、辦公費として、ほぼ經常的に必要な金額の徵集を行ない、事務費等を賄ったようである。このほか各事業體や外廓團體の經營等、特別な事業のための臨時費は、それぞれ徵集していたようである。公行の外廓團體や事業體は、それぞれ獨自の會計をもち、團防費の如きは、莫大な金額に達したが、一錢の誤りもないまでに記帳され、清算されていたという。商會にも總合的な豫算制度はなく、事業ごとに攤派をとるという方法は、以前と全く同じやり方である。ほかに罰金收入については同治十三年碑に見出し得るが（A2）、この收入も豫想外に多かったといわれている。

第二章 ギルド

第一節 製紙業の場合

サラチの製紙業者は、クズになった蒭縄を利用して、蒭紙と草紙を造っている。製品は地元消費で、年産五千渠（一渠は百八十枚）という微々たる營業である。紙房の公稱資本は一店舗あたり二百元といわれ、その道でたたきあげた技術者（老師傅）が、獨占または合股で開業した零細企業である。機能資本家（帶財掌櫃）のみであつて、寄生的な投資家たる財東も、出資金をもたない單なるマネージャー（經理）も見あたらない。掌櫃の下に、賬房と工房がある。賬房には店員（夥計）と徒弟（學徒）がいて、材料の買入れや製品の販賣などに當たり、俸給制で身股はない。工房には職人（老師傅）がいて作業に従うが、工房專屬の徒弟もいる。老師傅はすべて包件工（出來高拂賃金の從業員）であつて、道光十九年の行規にも、包月工（月給制從業員）制度を嚴禁した條項がある。學徒は、賬房の商業學徒も、工房の手藝人學徒も、ともに薩縣人しかとらず、年期は三年で、入門に際し、祖師「祭倫」に叩頭の禮を行なつてゐる。したがつて製紙業では、經營的には帶財掌櫃の專制支配が行なわれ、店員や職人との間に共同體的關係はないが、労働組織からみれば、徒弟制度によつて家族制度に準ずる支配隸屬と仲間關係が生まれ、ギルドの基礎となつてゐる。全同業者としていえば、出身地はサラチ郡であり、祭倫の弟子であり、店舗が紙房巷に集中して存在するところから、一業一街的な隣保制度もみられる。ギルドとして封建的共同體をつくり、集團的利己主義の追究が行なわれ、切つても切れぬ因縁にある。それにもかかわらず、老師傅を包件工と規定している點にみられるように、經營と職人の對立は、賃金を中心として決定的なものとなる可能性があり、この統一性と對立性とが、製紙業者の歴史そのものだったわけである。

一 紙行社（義和社・紙房社）

製紙業者は乾隆六十年に義和社を組織したといわれるが、これには經營者も職人も、ともに参加し、「舖戶手藝人共立」によるギルドとしてスタートした。嘉慶年間に至って勞資の對立が表面化し、職人だけのギルド公義社の結成をみるに至ったが、道光九年、老師傳は義和社から全員脱退したので、義和社は勞資共同のギルドから、店舗商業資本家だけの共同體に變質するに至った。義和社は紙行社ともよばれ(F2)、職人の脱退後もギルド名は變更しなかった(F4)。同治以後は紙房社という名がよく用いられるようになって(D11)、今日ではほぼ紙房社に統一されている。本節においては便宜上、通じていう時は紙行社、老師傳の退出前を義和社、退出後を紙房社と表現することにしたい。

義和社の役員である社首は、「公立」の趣旨によつて舖戶と手藝人の兩方から出ていたようである。舖戶も老師傳もともに社に加わっていたのであるが、工賃の問題で紛争のあった時、老師傳は社首を擁して社をリードし、工賃の改訂、行規の變更に成功している。これには社の機關を動かすとともに、各自の職場において「紙料の損壞」すなわち製紙原料の破壞によつて、各店舗を劫かす手段に出たことも與かつて、力があつたようである。敗れた店舗側は官に提訴し、官權をかりて漸く妥協案に到達したのであつた(F2)。この紛争後、間もなく老師傳の脱退をみたわけで、店舗側としては最低の時期だったのである。これに反し、紙房社は商業資本の共同體であつたから、店舗の全部が二軒ずつ交代で順番(輪流)に會首の任に當たり、老師傳は無關係となつた。一九四〇年の會首益豐泉・徳生泉も、こうして選ばれたのである。店舗の數は道光五年に八軒(F2)、日中戦争後は七軒に過ぎず、會首は一年で交代するから、選任は非常に公平だった譯である。これは各經營の大きさが平均していたことも、影響したと思われる。

紙行社の事業は老師傳への規制・祭祀・慈善等で、前二者が主なものである。老師傳への規制としては、工賃と生活の兩面にわたっている。義和社では工賃を「社會」(社の會合)において決定し、規約(行規)において明示するのが、道光以前からの慣習であつた(F2)。紙房社は老師傳のギルドの公義社と共同で賃金決定を行なつたのであつて、近くは一九四一年の行規にその實例を見ることができ、生活の規制もまた兩社が同面議定の上、決定しているが、老師傳の店舗

への居住をきびしく強制し、夜間紙房に歸って寝ないことのないよう、嚴禁したりしている。祭祀としては觀音廟内にある祭倫を祖師とし、その誕生日の十月十日から三日間、盛大な廟會を行なつて、祖師を頂點とするヒエラルキー的な封建秩序を絶對化し、あわせて社の結合力を内外に誇示する場とした。白い面貌の祭倫の神像は、今日なお香煙ゆらぐ中に、廟内に現存している。紙房社になつてからも祭祀は公義社と共同で行ない、經費も折半して支出することを、道光十九年の社規で決定しているが、後に公義社はこれからも脱退した。二つのギルドは同日同廟で祭典を別々に行なうのが、近來のしきたりである。廟會のとき、最近まで演劇の奉納が行なわれたが、今では領性・燒香・念經等を含む式典のみが行なわれている。神威^②御利益は、廟宇や神像を立派にすることを前提とするので、祖師廟の修理には非常な熱意を燃やし、嘉慶五年の大修繕を初め、光緒九年の重修にも主力となつて努力している（F4）。慈善事業では、公行の祭孤に協力している（D11）。

義和社の經費は、店舗と老師傳が半分ずつ出し合つていた。老師傳の分は、工賃の中から何%かを抽出して「按件」（製品ごとに）の方法で徴集した（F2）。紙房社では、全店舗に均等分したという。義和社の經費は定額の經常費にあつて資金を用意し、廟の修理費等もその積立金から拂うのであつて、不足分だけを攤派するやり方であつた。紙房社となつてからも兩社の共同事業はかなりあつたが、その費用は兩社で均分するのが普通であつた（F4）。

ギルド規約についていえば、義和社の行規は、老師傳の賃金とギルド經費の分擔方法について規定し、時々改訂されてゐた。「行規甚嚴」とあるように、嚴格に守られていたという（F2）。紙房社でも古くは道光十九年の行規に始まり、近くは一九四〇年・一九四一年のものに至るまで、何度も改訂されている。いずれも公義社と共同で作つた規則である點は、注目に値する。分裂後も、老師傳の協力なしには、賃金規約など實行不可能だつた譯で、職人の發言權の強さを讀み取ることが出来る。内容的には老師傳の義務に關することのみで、賃金および勞働條件が中心である。サラチの製紙業としては、この點が共同體的強制の中心であつたと思われる。共立行規では、違反者は罰金^③または除名^④に處し、被除名者はギル

ドのいずれの紙房においても雇傭しないと聲明している。規約の強制力は、この規定からくるというよりも、共同體の壓力によるというべきであらう。

二 公 義 社

公義社に關する最古の記録は嘉慶八年だから(F7)、義和社が店舗側だけのギルドに變質する以前に、公義社がその傘下の團體または獨自の團體として存在したことは明らかである。道光十九年の區額に、道光九年義和社から分立したと見えるので、それ以前は、紙房老師傳は義和社と公義社の兩者に参加していた譯で、後者が前者の一部分であつた可能性も考えられる。いずれにしても、獨立後の公義社は道光(F6)同治(F3)光緒(F4)を経て今日に至るまで、老師傳のみのギルドとして活躍した。

公義社には全老師傳が参加したが、その數は三・四十人位のものであらう。會首は「糾首」^{③④}ともいわれている。六人ずつ一年交替で、全員が輪流で、その任につくという。記録から見ると、「議罰」にも祭祀にも「會首集聚」^⑤として決定し、經理しているのであつて、會首團として責任をとつてゐることがわかる。行なうところは老師傳の生活的・資金的規制と、相互扶助および宗教行事が主なものである。生活規制は、紙房社と共同して行なつたのであつて、店舗内居住を強制しているが、これは職人の自由を制限し、賃労働への道をふさぐものといふべきであらう。賃金規制については、職人ギルドだけの規則になっているときと、勞資兩ギルドの協定で決められた場合とがあるが、實質は相似たもので、高賃金を希望しながら、商業資本側の承認を得る必要性との矛盾から妥協的なものとなっている。道光五年の爭議については前に記した。道光十九年には公義社單獨の行規を制定し、包月工たることを嚴禁し、^⑥また共同行規において包件工に對する賃金標準を示している。^⑦一九四一年にも紙房社と議定の上、抄紙工(紙すきの仕事)には一渠(百八十枚)に付き三元七毛、晒紙工(紙を乾かす仕事)には一渠に付き八毛七分六釐、打雜工・染退蔬工・破蔬工、解・斬・整蔬繩工(いずれも準備的または補助的な仕事)などにはそれぞれ單位出來高に對する賃金を、「歷遺の規章に依照し、社會の情形を參酌し

て」決定したという。包件工に對する賃金の決め方は、以前からこのような社會的分業によつて區分していたと想像される。包件工を守ろうとしたのは、ギルドの前近代性の表現であつて、近代的賃金制度の萌芽である包月工が、時代の潮流になつていた事實こそ、重視さるべきであらう。相互扶助については、道光十九年の行規に明示されていて、老師傳が死亡した際には、公義社の所有する義地二ヶ所に埋葬することができ、棺材も埋葬も社で引受けてくれたのである。なお、この助葬事業には、店舗側は一毫も關係がないことを特に斷わっている。宗教的行事としては、十月十日に始まる三日間、廟會を行なつて祭祀共同體の實をあげようとしているが、そこでも祖師信仰の再生産により、職人徒弟制度を擁護することに於いて、プロレタリアへの道を阻止するという結果を招いている。同治六年（F3）光緒九年（F4）に觀音廟の重修を助けているが、祖師廟が同寺の一廓を占めていたためで、神威を高めるためには努力を惜しまなかつた。

公義社は入會金・布施・月兒錢などで資金を蓄え、必要に応じて支出している。入會金は、道光十九年の社規では「上帮社錢」と呼ばれ、抄紙工人は五百文、晒紙工人は三百文であるが、サラチの紙房で、徒弟から工人に昇格した者は免除され、「外路來的老師傳」に限つて納めさせることになっている。一九四一年の行規では、抄紙工人十八元、打雜工人十四元四角、晒紙工人十二元六角で、やはり「外省人入主薩縣時」のみに負擔させる規約である。ちなみに上の金額は、抄紙工・雜工・晒紙工の實收入に大體において比例するものと考えられ、各職種ごとに仕事の難易によつて、出來高に格差があつたことがわかる。入會金は少額とはいえ、共同體への加入の條件であり、奉納金としての意味をもっている。布施は會費であるが、道光十九年の行規では、抄紙工人は抄紙一刀（すなわち半渠九十枚）ごとに四十文、晒紙工人は一日に付き二十文であつた。一九四一年の章程では、表面的には明示されていないが、工賃のパーセントを徴集したというから、各人の分擔額は、前記の工賃から算定できる。布施は會費の内でも最も基本的なものである。月兒錢は補助的な會費で、道光十九年の行規によると、抄紙工人は月八十文、晒紙工人は月七十文を納めたのであるが、現在は廢止されている。

今日、見ることでできる公義社の章程は四あつて、いずれも行規と呼ばれている。一つは道光十九年のもので、紙房社と共同の行規であり、老師傳のみを對象とする規制だと初めに斷わっている。沿革を敘述し、老師傳の分擔金と祭祀について記し、分擔金を納めない時は三千文の罰金を徴集することも付記されている。これとは別に店舗のみに關する行規が紙房社の名において、老師傳のみに關する行規が公義社單獨で、それぞれ制定されていても不思議はないが、そのうち後者については、同年の公義社行規が残っており、包月工の禁止と助葬の制度について規定している。一九四〇年と一九四一年の行規は、やはり共立で、かつ互いに相補關係にある規約である。前者は歸宿の禁で、罰金と除名の罰則を詳述し、後者は工賃と入會金に關する規程で、併せて歸宿について付言している。道光の場合と同様、ここでも紙房社と公義社に、それぞれ單獨の規條が別個にあるといわれているが、その條文をみつけることはできなかった。

第二節 サラチ小行の概観

サラチの小行とは、公行の傘下の社會集團を意味するが、第三表はこれを表示したものである。先ず四行はその沿革が最も古く、かつ有力な營業で、地元の商業資本を代表する實力をもつグループである。おそらく歸化城十三行の例に、ならったと考えられるが、四行の全體で公行を組織しながら、各行はそれぞれギルドを單獨で組織し、各店舗は公行と小行に二重に加入したわけである。四行は縣下の農村を支配する商業資本の太綱で、ギルドマーチャントに結集する理由をもっていたが、營業内容の相違から、それが混合ギルドとして單一の組織に統一されるほどの内面的連關性をもたなかった。で、ギルドとしては各自がそれぞれ組織を作ったわけである。商業ギルドにあつては、漢・回の生肉業者が、肉行の得勝社（漢）と牛肉行（回）に分かれていて、民族問題をのぞかせている。手工業ギルドでは、商業資本と職人の對立が焦點である。毛織業と皮革業においても、店舗側に對し、老師傳が別個に團體を持ったのであるが、前節で述べた紙業と大同小異の事情にあつたようである。運輸業ギルドは、貿易商のため、砂漠の船の役割を果たしたもので、縣城というより

第三表 サラチ小行大観

行(社)名		最初の紀年	同資料	關係寺廟	營業の内容
一、四 行					
雜貨行	乾隆 34	D 1			都市の手工業製品の農村への卸賣業者 小麥等の脱穀・製粉・販賣業者 質屋(主として農民向け) 穀類の仲買業者
麵行 (六秤社)	"	"			
當舖行	"	"			
二、商業ギルド					
鮮果社	道光 14	B 3	財神廟	果物小賣商	
恒山社	光緒 9	F 4	財神廟	屋臺店(各種の小賣業を含む)	
保安社	" 23	B 8	財神廟	家畜仲買業 肉屋(漢人經營)	
得勝社				貨行(蒙古・新疆への輸出品仲買店)	
翠錦社				牛羊肉店(回民經營)	
牛肉行					
三、手工業ギルドおよび職人ギルド					
生皮大社	嘉慶 24	A 9	關帝廟	毛皮のなめし業	
魯班社	乾隆 32	G 1	祖師廟	木廠(材木卸賣)と大工	
義和社 (紙行社・紙房社)	" 60	87	觀音寺	製紙業者	
公義社	嘉慶 8	F 7	"	製紙業の手藝人	
酒飯行	" 12	9		飲食業	
金爐社	道光 24	40	祖師廟	鍛冶屋	
僊翁社	同治 9	A 14	關帝廟	染物屋	

得勝社	同治3	D 11	城隍廟	柳匠
吳眞社	光緒6	G 6	祖帝廟	畫匠（ペンキ塗・葬儀用紙細工・壁紙や白堊による壁面修理等を行なう者）
威鎮社	〃 30	A 15	關帝廟	山羊皮・羊皮の鞆業
銀行社	民國17	G 7	祖師廟	銀匠（銀元寶および銀細工業者）
四、運輸業ギルド				
全渠社				
五、農民團體				
牛垠社				駱駝による運輸業（漢人業者）
六、街巷自治體				城内に住み、北門外の蔬菜園藝農業に従事する農民の團體
西大社	嘉慶2	B 2	財神廟	西大街にて組織
東大社	（道光2）	（A 3）		東大街にて組織
七、その他				
馬王社	道光25	A 12	財神廟	麵行中、馬を有する者のみで組織

註 資料を特に示さないものは、いずれも楊青蘭會長の高教による。ギルドの營業内容もまた同じ。

大都市的なギルドである。蔬菜園藝農民の團體も大都市的な存在である。街巷自治團體は、ギルドマーチャントに押されて、わずか二行に止まった。馬を有する者が馬の崇りを恐れて社を組織することも、綏遠地方で廣く行なわれている習慣である。

店舗には個人經營のものもあるが、商業資本を集中して合股（合夥）となっているものが、有力である。手工業も、商業資本の支配を受けている。各店舗では同郷のものを雇い、時に小數の異分子を加えることはあつても、同郷性を脅かすほど大量に採用することはない。楊氏は、他縣のものをを用いると、性質も判らず、言葉も通じないからだと説明したが、

同郷關係というパイプこそ、出身地の村の社會秩序をギルドにもち込み、地主・農民の關係を親方・徒弟の關係に、村落共同體をギルド共同體に、それぞれ譲渡し移行させるためのチャンネルとなつたわけである。徒弟に採用されるには、經理の友人らが紹介人となり、別に舖保を要するのはむろんであるから、仲間の子弟以外は採用される可能性がほとんどない。入店に際しての儀禮や、職場においては、家父長專制が貫徹していたが、そうした封建的秩序は、今日ではかなりくずれたという。年期は三年で、食事は店から提供されるものを、全従業員とともに會食する。俸給はなく、休暇も一般的な休日以外には與えられていない。年期中は、休暇を得て歸郷することも、認められていない。年期が過ぎ、店舗の承認が得られると、夥計（商）または老師傳（工）に昇格して、一人前の取り扱いをうけることになる。夥計を七・八年つとめると、多くは身股が與えられる。人物の如何によつては、果進して經理に進み、最高の身股が與えられる。經理交代の場合、習慣として、他の店舗から新經理を輸入することは行なわれていないというが、身股を通じて家産共同體と同じように、夥計の共同體ができていて結束が固く、輸入する餘地がないことを物語っているのであろう。いずれにしても、夥計は商業資本に固く結ばれている。老師傳は、身股を有するものもなく、經理に昇格していく可能性もないから、商業資本の單なる雇傭者とみなし得る。財東は無機能資本家であつて、經營には平素は關係しない。經理を選定する權限をもつといつても、夥計の支持が必要で、財東のみの意志による一方的な經理の更迭は勿論できない。官利などの出資條件や添股・抽股・倍股の如き財股の變更には、全財東と經理との同意を必要とし、公積金も經理の同意を得てはじめて積立て、または處分し得る。公積金は、(1)商業資本を集積すること、(2)缺損の際に備えることが目的で、店舗がこの資金に使う時には、借用分について、正當な利子を支拂うという。身股は擬制資本であつて、夥計に對し、店舗への貢獻度に應じて、一分から一厘までの株を與えて、決算時に利益金の配分をうける權利が與えられる。老舖になれば、身股の總股數は漸増する。利益配分は、身股・財股を同じ資格に見たてて、按分比例で配分を行なっているから、ある年月を経過すると、名目上閉店して、それまでの身股を御破算にすることも多い。官利は財股に對して、普通の利益配分とは別に、一定の高利

貸的な利息を支拂う制度で、商業資本のもつ高利貸資本的性格を示している。店舗は商業資本の共同體であるが、財股と身股の組合わせは微妙であり、財東は寄生化して、夥計共同體となっている場合もある。職人の店舗に對して有する地歩は、隸屬的であり、店舗を離れて自分の仕事場を作り、または遊職人として生活するものもある。なお經理が山西幫の場合、財東も山西人であるのが普通だし、河北幫の店舗の財東は、京津に在るのが普通である。

社には店舗または個人が、メンバーとして參加している。古記録によると、魯班社は約九十人で個人が（G2）、保安社は三十七人で個人が（B8）、各々メンバーとして名を連らねている。いずれも個人經營の商工業であることを示し、合股（合夥）の場合は店名を用いている。會首（役員）としては、生皮社が十二店舗によって組織され（A9）、保安社が四人を總會首に推している（B8）。會首には會を代表する資格を與えている。

今回の史料調査が寺廟に限られた關係から、ギルドの事業としては、その方面以外は明らかでない。魯班社が乾隆三十八年以來祖師廟内に社房を設け、會活動のギルドホールとしているなど（G2）、各ギルドは關係寺廟にギルドホールを設けて、祭祀に限らず、團體活動の根據地としてきたわけである。第三表に示されているように、商業ギルドは關帝廟（武財神）または財神廟に關係をもっていて、商業資本の性格をまる出しにしているのに對し、手工業ギルドは祖師信仰に生きていたのが特色である。徒弟職人制度の反映として、技術と封建的な仕事場の秩序を重んじたわけであろう。魯班社（魯班）・金爐社（老子）・吳眞社（吳道子）・銀行社（祭神不明）は、祖師廟内にそれぞれ祖師像を設け、白頭佛を祭る生皮社は、關帝廟内にその神像を置いている。威鎮社は單刀會として關帝を祭り、僊翁社は梅仙葛仙の二仙を祭っているが、ともに祖師として信仰しているのであって、關帝廟内に祭壇を設けている。紙業は前述のように祭倫を祖師とし、觀音寺内に神像を置いている。雜貨行は乾隆三十四年に「供奉香紙」の費用を支出しており（D1）、馬王社では、現在四月一日から六日まで、關帝廟で廟會を行なっている。むろん各社は、關係寺廟の修繕に熱意をみせ、魯班社が乾隆三十二年（G1）・道光二十四年（G3）に祖師廟を重修しているなど、その實例は甚だ多い。ギルドは宗教行事に如何なる精神によっ

て取り組んでいるかという点、祖師について、興味ある記録が残存する。乾隆三十二年に魯班社は「魯班は衆藝の祖であり、本匠の衣食は魯班の發明せる技術のおかげだから、衣食のよって出ずるところを忘れずに、これに報ゆることが必要である。その精神がなければ、巧聖も師心なく、良工も規矩なく、同權を主張し、經營に従わぬことになるう」(G1)と云つて、經理(巧聖)―老師傳(良工)―徒弟間の家父長的秩序を、祖師信仰によって維持せんとしたことを示している。金爐社では、道光二十四年に祖師廟重修の理由として、「元に報ずる所以」^④をあげているが、立派な廟をたてることが神威を増し、したがって各自がうける恩恵も増大するという論理が、報恩の前提となっていることに注意すべきであろう。街巷自治體でも演劇を行つており、東大社は戲臺子(野外演劇場)でやつていた。

慈善事業としては、公行の祭孤に得勝社が参加し(D11)、包頭關帝廟に四行の各社と酒飯行とが寄付しているという實例を紹介するにとどめる。^⑤

資 料

A 關帝廟所在資料

1 興利除弊(額)

賞換花翎欽加運同銜 特調薩拉齊撫民府卓侯升加五級紀錄十次周爲「曉諭事照得興利必先除弊方無擾累之虞愛民尤貴卹商宜思久經之計查本府署進款寥々辦公竭蹶向有到任規名」日盈千累萬所費不貲實爲閭閻之累本府下車伊始留心訪查洞悉此弊若概行刪革所無辦公之資若仍舊派攤則有「累商之苦再三籌度惟有稟明 別憲大加裁汰庶官商兩受其益可以繼久遠而無弊矣茲蒙 批准允行立案每年改」爲辦公銀二千一百兩永革到任規名目合丞出示曉諭爲此諭仰闔境商賈人等知悉自本府蒞任爲始即將所有舊規「盡數革除遵照詳定公費數目嗣後無論實缺署任永遠遵守爾商人等亦宜仰體斷意按年派交毋得違誤各宜慎遵特示」計開「薩拉齊每年公費銀九百兩」包頭每年公費銀一千二百兩」

薩拉齊公行鄉總 義盛恒 王佐國 巨秀湧 趙連晉 豐裕號 不存義 泰恒裕 董太清 源泉彙 趙允中 漢興店 董純
包頭鎮公行總領 泰泉昌 高廷 萬興魁 趙映月 新義盛店 解汝舟 復義興 徐連 復盛西店 高曜 長盛德 郭世華
光緒十八年壬辰五月

(碑陰)

周老公祖德政碑文……下車伊始即將數十年之積弊一旦而除之是專利商民而不爲身謀彼汲々於利者其間相去何遠哉……惟德被商賈功施闔閭俾休養生息而富教漸興此公之意也

2 好善樂施 (額)

三品銜侯選道蒙古民事府文德政 同治十二年夏四月 經理^{團練}人 (天元店など二十四の店舗名と二十四の人名)

同助義舉 (碑陰額)

一入過罰項錢一千一百二十千文 (ほか各村公社および各鎮公行が八十千文乃至十千文寄附)

3 薩拉齊東大街重修龍泉井記 (道光二年荷月) (本文略) 公行布施八千文 (他商店多數)

4 署薩拉齊撫民事務儘先即補府正堂呼之爲出示禁塞東渠永遠不准復開以杜訟累而免滋禍事案查 據善友板申村甲會高步壘等呈控二十家惱木汗西河堰等三村張海亮等違斷偷開東渠致釀人命…… 薩屬善友板申村甲會^{蒙古銀多} (他計十人)

宣統三年六月初九日

5 恭頌欽加^{鹽運使銜} 賞戴花翎 山西總理旂民蒙古事務分巡即汝兵備道兼管歸化城等處稅驛加五級隨帶加五級紀錄十次貴老公祖大人

諱肇德政碑記 (回民亂による動搖を防止し治安を保ち得たことに付て記述) 經理本街總舖戶等^{新福盛魁} 元盛德^{和當}

全盛西 元興西
元盛魁 德盛泉 同叩 同治四年歲次乙丑小陽月穀旦

6 會審水利斷定章程碑 (道光十八年大呂月) 仲斷各村使水章程碑記 薩之東疆有抗蓋村九旗官地及十一股七厘同引黑

河之水流澆地已歷多年因嘉慶二十五年將舊河淤塞不能下流 均失水利道光十年杭蓋村增盛永劉增等新開 道澆灌自己

地下村不能遇流道光十七年間十一股七厘等村蒙民」商同幫給杭蓋等村開渠花費工本仍然照舊□□兩出同願書立合同約各執一紙蒙民量幫給杭蓋村劉增等開渠工本」錢九百千文幫九旗官地渠頭孫廣等錢三百千文幫杭蓋村蒙古□□世等錢二百五十千文俱係從十一股七厘□□人所借蒙古烏拉等向十一股七厘□錢五百五十千文以爲辨水之□其水任十一股七厘使用自道光十七年九月十一股」七厘蒙民等杭蓋九旗等村按三股使水每股一輪以十三日爲期上下輪流週而復始每年八月開渠打坝春季取浮水灌」地每一輪以五日爲期至三月十五日止嗣後十一股七厘與杭蓋九旗開渠村填蒙古人民不得退縮倘河有遷移填有」捐壞並遇河工口舌一切花費按三股均攤如有水不順流蒙古竭力辦理不許惟諉如推諉者準民人討前借錢至十八年」那那村蒙古薛克補特爭水上控蒙委薩府尊」盛大老爺 佐領伊老爺會審斷令那那村水分原在九旗十三日之內應向九旗分使不可得混爭其餘使水章程俱照合同約蒙民一體遵□此」係至公至當斷案蒙民各人服具結永以爲例」地戶」工布村（著賓陶殿元等十四人蒙古二人）」劉家營吳允」大岱村（著賓田甘雨など十五人蒙古四人）」保同河村（曲長發等四人）」南撓尔村（如意隆等二十一人）」

7代理薩拉齊理事府王爲」公行國防總局立」衆志成城」鄉總」復源泰・廣順恒・謙和當・天元當・豐裕店・復盛泉・會逢號・永興成（店名の下に各人名一あり。略）」同治十年辛未冬月吉日

8光緒十九年歲次癸巳桂月穀旦」急公慕義」鄉總」永合店・泰泉昌・泰恒裕・源泉棗・崇盛源・義泰永・三義泉・會逢號」（以上の店鋪名には同時に個人名も併記されていたが省略す）薩拉齊公行立

9嘉慶二十四年四月吉日」豐昭景福」（德泉泰など十二の店名と人名）」生皮大社會首等叩敬

10本郡鄉耆總領糾首（三十八人の人名略）」義炳乾坤」道光二十五年

11本郡鄉耆總領糾首（三十八店 店名略）」忠昭天地」道光二十五年（右の10と對のもの）

12道光二十五年 馬王社

13咸豐元年 全盛社

14 同治九年 僊翁社

15 光緒三十年九月 威鎮社

16 光緒十年歲次中沅「盤石常安」鄉總「泰泉昌・天順泉・德和當・和義隆・巨泉湧・源泉當・永合店・三義永・馬廣祖

・李明安・楊聖麻・杜廣心・楊棟樑・呂祿・賈廷忠・貴方正」薩郡公行立

17 新舊鄉總經理叩敬「明德社」咸豐三年閏街公置

1より6まで石碑々文。7より16まで匾額。17は香爐銘文。

B 財神廟所在資料

1 軍修財神廟碑記 (咸豐九年中秋)

……郡紳吏商農輸募重建……」經理 鄉總糾首(店名人名四十)

2 嘉慶二年 西大社會首敬 (復興院等十二店鋪)

3 道光十四年 鮮榮社 (萬盛泉など七店鋪)叩敬

4 咸豐八年無射月穀旦「聖德神尊」鄉總經理叩敬

5 咸豐八年季秋之月「(天順泉など三十八店鋪名及び人名) 鄉總糾首等叩敬

6 利 鄉總 天盛店 義成泉 天享盛 新福成魁

澤 天和成 義成美 豐裕長 人和當

均 鄉總 郭開業 武冠源 邊城 郭體仁

沾 范德玉 梁榮山 周熙 韓正斷

同治八年歲次己巳大呂月中旬

7 同治十二年 馬王社

1 は碑文、2 以下は匾額。

C 玉皇廟所在資料

- 1 特授薩拉齊管理蒙古民事府加五級紀錄十次智太老爺功德碑（乾隆四十年）
（重修の由來を述ぶ）……東西各廂房五間爲郷社之所……總理糾首（楊逢春等三十一人）
- 2 重修薩拉齊廳玉皇廟碑記（乾隆四十八年）（本文は薩拉齊縣志、卷十五・藝文・散文に收む）薩拉齊廳使者智常謹記

3 玉皇廟續修碑記（光緒七年中秋月穀旦）郷總糾首（萬興魁など店舗名二十八）保長潘福榮 王正倫

4 乾隆歲次癸卯桂月「帝德廣運」（商店名として會錦廣など二十六）薩拉齊本街經理糾首

5 中秋社會首（永德隆ほか店舗名・個人名十）主宰萬化「乾隆四十六年立

6 修理玉皇各廟墻垣并橋壩記

……於是詢謀於衆將官道旁之樹株擇其高大稠密者善價而沽之以爲眞作之用則是不廢事不傷財一舉而敬善皆備也……賈樹錢六十八千文……」董事郷總 復成永・永德隆・元享店・増隆合・廣盛隆・德合魁・會逢號・俊德昌・恒充局・得勝園・萬興店・復興永・萬美園・趙發旺」嘉慶八年歲次癸亥中秋穀旦立

7 重修樂樓廟垣匾額（本文略）

復興魁 世德泉 興盛泉 萬金奎 永茂玉

郷總 大來號 聚和號 意成號 天成店

元興和 世德恒 興盛榮 萬興魁 永益店

保長 潘發榮 王益偏

道光十九年仲呂月上浣吉日立

D 城隍廟資料

1 鼎建城隍廟本街題布施碑記（乾隆四十三年己丑孟秋之吉）

……乾隆初年設官以臨厥後五方接踵農工商賈聚斯土者盈寧有慶賀賦生殖迄今熙々穰々咸□樂土知有藉于陰力者不少也
……凡居市廛之民皆踴躍自鄉耆以迄街巷出粟布金鳩工興造……

（碑陰）

（店鋪名人名多數をあげた後）雜貨行閤行共施銀一百七十五兩 本街雜貨行供奉香紙銀一兩二錢 麵行閤行共施銀二十一兩 當行六家共施銀四十二兩 店行閤行共施銀十四兩 自二十四年至二十六年本街辦公務餘施銀十兩 於三十年謝雨獻戲餘布施錢十二兩

2 新建城隍廟碑記（乾隆三十四年）

（糾首二十八家による）

3 城隍廟重修碑記（嘉慶二十五年）

……明年丙子又有年因舊更新之事其在斯乎糾首鄉總等因承府憲之命選郡中之能者分其任……（本文は薩拉齊縣志、卷十五・藝文・散文に收められているが、勘要の場所に書き損じがあるので、それを正す）

4 （3の寄付名録）

包頭鎮……大行施銀一百五十五兩

5 重修樂亭及補葺廟宇壇垣彩畫山門碑記

……本郡鄉總等計議重修募化得金千餘緡……

廣順恒 李合錦

三合德 趙進玉

元興和 楊通籍

值年 全盛西 董岐亮

經理人 白玉成

保長 梁建祿

步辦 高煜

鄉總 人和當 田 威

(他七名)

玉 富

范朱元

元享永 馮煥章

萬豐號 楮 璽

元隆店 張丕基

同治五年丙寅小陽之吉穀旦

6 道光二十三年「消災弭患」 闔街舖戶經理鄉總「慶豐泰・人和當・元盛永・合盛永・雙合昌・昌興號・元興和・元和

店」敬叩

7 同治五年孟冬之吉「速振□府」鄉總 應順恒・三合德・元興和・全盛西・人和當・元享永・萬豐□・元隆店

8 光緒八年壬午五月下浣穀旦「明陰洞陽」公行鄉總叩敬「泰泉昌(張永瑞) 泰恒裕(王吉) 崇盛源(楊雙成) 復源泰

(毛鳳來) 新盛店(薛吉士) 雙順源(黃銘) 德和當(殷佩琛) 新盛泉(張錦雲)」「(カッコは實は別行に並記されてい

たもの)

9 光緒十八年孟夏穀旦「明應顯」甲頭白^{元叩敬}

10 民國歲次甲寅南呂月下浣穀旦「日監在茲」商會經理人永合店(賈希溫) 復興當(郭志謙) 泰泉昌(周宏緒) 新盛泉

(傅繼先)

11 恤陰會祭孤魂碑記

……今有本街紳士等仰體祀厲之心議創恤陰之會亦於清明節七月朔十月朔延僧諷經設有施食以祭孤魂募得錢一千串存於四行每年生息錢九十六千文以爲祭孤之費……」沙尔沁公行施銀二十五兩 善岱鎮公行施錢十二千文」鄉總元泰昌・雙

合昌・天元當・義盛恒・永盛長・元興和・德興店・元享永」經理人（李聯香など四人）」同治十三年南呂月」

（碑陰）

……紙房社得勝社以上二家各施錢六千文

1 から5 までは碑文、6 から10 までは匾額、11 は隣接せる恤陰會館正門前石碑々文。

E 呂祖廟所在資料

1 同治七年孟冬之吉穀旦「權司桂籍」值年鄉總 義成店・元盛魁・永豐泉・元泰昌・慶合昌・義成泉・元興和・元享慶

2 光緒九年應鐘下浣「變天贊化」

張元修 許德功 徐登壯 杜之傑

大興泉 泰恒當 豐裕號 天順泉

鄉□

德和當 湧泉茂 謹興店 復興隆

楊望麟 盧瀛洲 楊文會 寇新業

3 光緒十六年歲次甲寅南呂月穀旦「清□妙悟」薩郡公行鄉總叩敬」

寇新業 郭泰階 王放仁 毛鳳來

復興隆 小合店 復源泰 崇盛源

德和當 聚生樓 源泉棗 德合西

薛吉士 趙明清 武建振 李進榮

1 から3 は、全部匾額の文章。

F 觀音廟資料

1 佛廟碑記 （乾隆辛亥壬辰月吉旦）

(本文略)

薩拉齊行 施銀四兩五分

2 特授薩拉齊蒙古民事府加五級紀錄十次奎大老爺德政」從來良法不舉則遵守無自弊端不革則積習難除此所以平爭心而澆風者必有以奉良法而」作之準乃□以革弊端而防其變」今我紙行因工作人等憑恃社首變亂舊章呈控□□老爺案下一爲利斷兩造俱平但恐法良意美之判久而或湮□刻判□□以□□□□□□復立社會□□抽錢以□□費近(不明十三字)于故□□憑恃存」錢增長二價(不明十六字)故恒茂全等八家(不明十字)控庭訊之下□宏(不明十三字)有行規甚嚴即欲工作非社首放話不敢自專」是一方紙匠之權(不明六字)宏德元世法之牛矣本宜責懲姑從(不明九字)革□□令將存錢賠給八家捐壞紙料錢八千文下餘按紙匠人數瓜分至工(不明七字)增長嗣」後社□臨特現□不准按月抽歛以杜滋生事端各具遵結實案此判」包頭鎮紙房□年幫紙行社六千文」經理人 恒盛全・東保興・廣盛永・保興全・德盛泉・恒興全・四成號・復盛泉」道光五年歲次乙酉十一月穀旦(不明の字は誰かが故意に削りしもの)

3 重修普濟寺誌 (同治六年)

(本文は薩拉齊縣志卷十五藝文散文の中に所收)

公義社施錢三兩

4 (光緒九年重修碑)

紙行社 施銀二十兩 公義社施銀十六兩 恒山社施銀五兩

八年鄉耆 泰泉昌 張永瑞 泰恒裕 王吉

九年鄉耆 天順泉 杜士傑 德和當 楊聖麟

5 具甘結薩拉齊廳公行鄉耆楊聖麟古佛寺七社會首(店名及人名十二)清眞寺鄉耆邸祿並阿訇寺內人等具甘結事

張永瑞

魏天榮 闡寺在社

白鳳翔

を記す)

光緒九年九月

(清眞寺が本寺の戲場地基を尺餘おかしたのに對し、回教郷老と交渉した上、老大人の訊斷を仰いで解決を見た次第

6 道光二十二年桂月「智創華陰」公義社叩敬

7 嘉慶癸亥「(題字不明)」公義社叩敬

1 から 5 は石碑 6・7 は匾額。

G 祖師廟所在資料

1 新建祖師廟碑記 (乾隆丁亥上浣之日)

(本文は薩拉齊縣志前出に所引 ただし最後にある左の三字を忘れている) 魯班社

2 新建社房姓名開列於左 (乾隆三十八年)

(陳典など人名九十)

3 祖師廟重修碑記 (道光二十四年) (縣志前掲所引)

(碑陰)

魯班社施銀一百零四兩 雜貨行廿四兩 當行廿兩 店行廿兩 面行十六兩

4 同治元年 魯班社

5 光緒五年 魯班社

6 光緒六年 吳眞社

7 民國十七年銀行社

1・2・3 は石碑、4 から 7 までは匾額。その題辭など、一部を省略。

H 聖母廟所在資料

1 急公好義「鄉總(人名八)」同治二年八月 本街公行立

2 積善好施「甲會 張貴・王啓・韻典仁・慶興泰

光緒十一年仲多月

1・2は匾額

註

① 安齊庫治氏の教示による。私鑒は歸綏識略卷一村莊、咸豐八年各縣奉本道札飭、查稟地方情形、薩拉齊。

② 歸綏識略、卷二十四・官制、卷十一・公署。薩拉齊縣志、卷一・輿地、沿革略。

③ 薩拉齊縣志、卷十五・藝文・散文「新建關聖帝君廟碑記」「新建祖師廟碑記」「新建聖母娘娘廟碑記」「新建城隍廟碑記」「火神廟碑記」「重建薩拉齊廳玉皇廟碑記」「新建觀音寺樂樓碑記」等参照。

④ 歸綏識略、卷十七・市集。綏遠通志、卷一〇九・食貨一、商業一、薩拉齊縣。

⑤ 歸化城十王廟地藏殿にある匾額による。今堀「中國封建社會の機構」八二二頁、所引。

⑥ 薩拉齊縣志、卷十五「重修官壩碑記」（宣統三年）は公社の名で記述されている。

⑦ 薩拉齊縣志、卷四・民族。

⑧ 薩拉齊縣志、卷十三・宗教。

⑨ 包頭關帝廟の碑閣にある嘉慶十二年重修碑。サラチとして、雜貨行八十兩、當行四十兩、麵行四十兩、店行三十五兩、酒飯行八兩をあげている。

⑩ 托克托關帝廟藥王殿にある重修黑河橋碑記（道光九年菊月）の施財名額の碑。サラチでは雜貨行が四十四千文、當行・店行・麵行が各三十三千文の寄付を行なっている。他の都市でも公行が、それぞれ寄付している。

⑪ 薩前同知文山公創建書院碑記（薩拉齊縣志、卷六・教育・育才書院附錄）。

⑫ 薩拉齊縣志、卷十五・金融・典商。

⑬ 薩拉齊縣志、卷七・縣商會。

⑭ 縣志には郷耆二、總領二で四郷總、楊氏は郷耆一、總領四で六郷總だったといっている。

⑮ 薩拉齊縣志、卷十・金融序。

⑯ 重修官壩碑記（宣統三年）、薩拉齊縣志・卷十五・藝文・散文、所收。

⑰ 薩拉齊縣志、卷十五・縣志、同右所收。

⑱ 新建呂祖廟樂樓碑記（光緒二十年）、縣志、同右所收。

⑲ 薩拉齊縣志、卷六・政治・交通、興蒙公路賦役供出數目表。

⑳ 薩拉齊縣志、第十、金融序。

㉑ 薩拉齊縣志、卷六、防務。

㉒ 資料A2および縣志、卷二・建置城市序。同卷十五、藝文、散文、所收「創築國堡訓練民團碑記」（同治九年）。

- ②③ 「創築團堡訓練民團碑記」②、「薩前同知文山公創建書院碑記」①、「文公德政碑」(A2) 参照。
- ②④ 薩拉齊縣志、卷六・保甲。
- ②⑤ 薩拉齊縣志、卷六・保衛團。
- ②⑥ 重修薩縣保安石壩碑記(成紀七三五年。縣志、卷十五・藝文・散文、參照)。
- ②⑦ 薩拉齊縣志、卷二・橋堤・保安石壩。
- ②⑧ 重修水潤溝石壩記(民國十三年)、縣志、卷十五所收。
- ②⑨ 薩拉齊縣保安石壩保管委員會組織章程(縣志、卷二・橋堤、所收。また註②参照)。
- ③⑩ 薩拉齊縣志、卷六・教育、育才書院 薩前同治文山公創建書院碑記(章程をこれに收む)。
- ③⑪ 小廠勿圖村にある義園の面積について、薩拉齊縣志の卷三・塚墓義園には一頃と記しているが、卷六・儲恤義地には五十畝とし、その畝數は故老の言によるもので檔冊がないため正確とはいえないと断っている。楊氏も五十畝といわれた。
- ③⑫ 薩拉齊縣志、卷三・勝蹟 塚墓義園。
- ③⑬ 薩拉齊縣志、卷六・政治 儲恤義地。
- ③⑭ 歸綏道志、卷二十二薩廳所屬商務に「薩廳舊有公行。設鄉耆總領六人如故」とある。六人というのは誤りである。綏遠通志經政九、金融は、この歸綏道志をそのまま引用している。
- ③⑮ 薩拉齊縣志、卷八・工業 造紙業。
- ③⑯ 薩縣公義社行規(道光十九年)、筮木輝馬氏「蒙疆に於ける土俗信仰」(巴盟興亞協進會本部、一九四二年九月刊、蒙疆民俗資料第一輯) 附錄資料篇、八一—一二頁、所收。
- ③⑰ 紙房公義社規牌(道光十九年)、筮木氏、前掲、八三頁、所收。
- ③⑱ 薩縣紙房公義社共立規章 筮木氏、前掲、八二頁、所收。
- ③⑲ 薩縣紙房公義社公定工資章程行規、筮木氏、前掲、八二—一三頁、所引。
- ④⑩ 薩拉齊縣金爐祖師廟重修碑記(道光二十四年、筮木氏、前掲、九〇—一頁、所收)。
- ④⑪ 薩拉齊縣志、卷八・産業・工業 工會。
- ④⑫ 筮木氏、前掲、六〇頁。
- ④⑬ 包頭關帝廟內碑閣にある嘉慶十二年重修碑。(註⑨) 参照。